

日本エアテック 社内報



2013年 増刊号
発行：日本エアテック 管理企画室



REPORT of Paris Air Show

第50回

パリ国際航空ショー出展

日本エアテック 社内報 2013年 増刊号

パリ エアショー出展にあたり

代表取締役社長 大山 和比古

この6月に、航空機の業界において、世界で最も大きな見本市が、フランス・パリで行われました。見本市自体は、一年ごとに、会場をイギリスとフランスで持回っており、今年は50回目の記念大会です。この記念すべきエアショーに、初めて当社も出展しましたが、これについて、各位にその意図と所感を申し述べたく存じます。

まず最初に、当社においては、海外メーカーとの取引や、海外販路拡大を主眼として出展したものではありません。従来からの顧客を大切に、満足して頂いた結果の積み重ねで当社の今日があります。さらに神戸工場も立ち上がりつつある中では、現在の顧客との関係を、ますます強いものとして、さらに当社の基礎を作るべきであり、今ここで、新たに海外との業務を自ら行うべきではないと考えております。

では、なぜ出展したかと申しますと、ひとえに当社水準の発露と俯瞰です。

今回、日本国内の最終メーカーは、日本航空宇宙工業会(SJAC)の集合ブースにて、また部品メーカー大小各社は、それぞれの地域の経済産業省各部署の集合ブースにて出展しております。そんな中、日本企業で、自力単体で出店したのは、島津製作所殿や三菱マテリアル殿といった数社に過ぎません。ですが、このように世界で一番大きく、かつ海外で行われる見本市である以上、出展手続きについても、通常の事務業務に加えて、仏、英のどちらか、もしくは両方での海外向け対応を求められる事は、各位におかれても、容易に想像がつくかと存じます。部品の展示許可は、当然、客先に頂きましたが、それ以外は全て自社で行えたという所に、当社の実力を各位に感じてもらえれば幸いです。また、同じ業種の方々にも、それを感じて頂いていると存じます。そして、これこそが当社にとつての成果のひとつと考えております。

また今回、生産技術からも人員を抽出しましたが、これについて、外国の出展してくるようなメーカーのレベルとはいかなるものか視察をする意味を込めております。

当社機械加工においては、既存の設備群のみならず、O.M.三井、東芝、リビティ、ハームレー等の最新設備、ならびに昨年度生産したFLAME MID等の加工を行える人的レベルは、決して諸外国に引けを取るものではないと確信しております。

また特殊工程については、溶接は30年もの年月をかけて投資、育成してまいりました。これも従来実績に鑑みて、各国他社に引けを取るものではないと感じておりますが、それ以外は、今後同じ様に長い年月をかけ、または新規導入して行くものでありますので、これについては駆け足、いやむしろ短距離走のような走り方で、世界に追い付かねばなりません。

まさしく当社の現段階は、150年近くも前に、奇しくも同じパリで行われた万国博覧会に、初めて出た日本と重ね合わせで見ることが出来るのではないかと考えております。米と絹しか産出しない貧乏国家が、世界列強と伍して生き残らなければならぬ状況も、またそっくりではないかと感じております。私たちは近代国家を速成で作し、近代装備を速成で備えて、より安価に私たちの領分を侵食しようと必死になっている海外の脅威から自らの立場を守らねばなりません。

ただそれには、多大な体力を必要とします。それを生み出すには、濡れ手に粟の儲け話など二切無く、ただただ日々の改善や、工数低減を積み上げるしかありません。これについて、各位の視点から、立場から、さらなるお力添えを賜ります様、重ねてお願い致します。

今回のエアショーで、世界の名だたるメーカーのブースの位置と、当社の位置との遠近を論ずる向きもあります。例えば、あるメーカーには近く、あるメーカーには遠く、それだけを見ればいろいろ取り方はあるかと存じます。ですが、私は、むしろ当社は、各位と共に50年かけて、今日現在、この世界で、ここまで、その位置まで、肉薄しているかと表現すべきではないかと考えます。これを維持、発展させるためにも、小さい事でも疎かにせず、日常の成果を積み重ねつつ、日々の業務に邁進して行きたいと、私自身、気持ち新たにしております。

最後になりますが、今回、参加決定して早々に、エアショー出展申し込みの締切から、本当はとくに半年ほど経過していた事が判明したにも関わらず、得意のフランス語を駆使して、いかにフランス人紳士らしく丁寧に(そして強引に)申し込み、フランス側の事務局から出展OKをもぎとったBUSCH Hさんを始め、当社エアショー事務局(釜江係長、林主任、三輪さん、岡力古爾さん)の皆さん、お疲れ様でした。



Miwa @ Paris Air Show 2013

三輪 東耶 - 世界の中のJAT -

関西国際空港からパリまで約10時間、長く感じるが地球の反対側に一日からずに行けるようになってきたのだと改めて実感した。これだけ行き来が簡単になると、もはや遠いから関係ないとは言えない状況になってきている。展示会では航空機に関係するメーカーが2000社以上集まるが、部品加工メーカーはその中でも1000社もなく、さらに大型部品、溶接も行うとなると10社あるかないかくらいで少なくて感じた。

日本から単独ブースで出展している加工メーカーは、当社とあとひとつ現地法人化している精密小型部品のメーカーだけだった。正直なところ、展示会に行く前は部品加工メーカーがゴロゴロいて当社は相手にならないのかと想像していた。しかし実際には当社の規模で展示会に出しているメーカーは少なく、技術的にも劣っていないと感じた。もちろん現状で満足して今のままでもよいと、近いうちに追いつかれ仕事を取られる。一歩リードしているからこそ、追いつかれないように技術を磨き、コストを抑え競争力をつける必要がある。環境を整えて海外から受注することも不可能ではないし、そうすべきだ。実際当社にドイツの素材メーカーが売り込みに来たりもしたので海外のメーカーはどんどん世界に進出してくるだろう。

これから航空機の需要はますます増えて世界中が短い時間でつながられる時代がやってくる。市場も世界中が影響しあい、もはや国境、国籍の意味もほとんどなくなってきた。そういう時代ではメーカーも個人もスキルがないと生き残っていけないだろう。日本の中だけみて安心しているのは手遅れになる。世界全体から見ると、これからはどうするか判断する、会社だけの話ではなく個人にもあてはまる気がする。

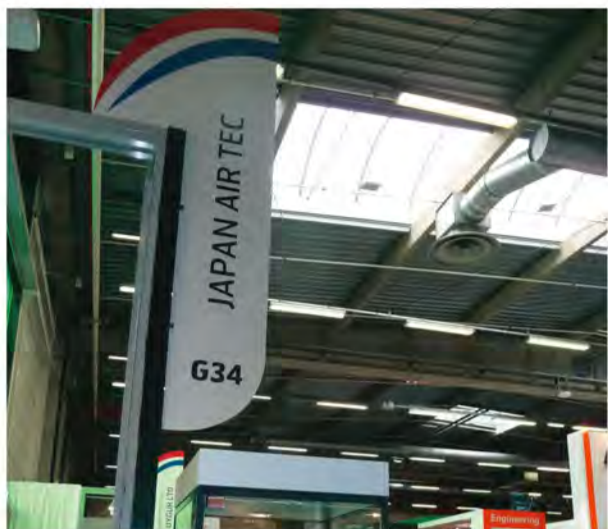
海外の人や文化に関わることがあれば、尻こみせず積極的に関わって欲しい。そうすれば世界が身近な事を感じて、会社でも自分の人生でも新たな視点で物事をみて様々な発見をすることが出来るのではないだろうか。

生産技術部 生産技術課 三輪東耶



REPORT of Paris Air Show

第50回パリ国際航空ショー 出展



2013年パリ国際航空ショー 開催概要

開催総面積
 合計 132,000 m² (屋内+野外+建屋)
 ※参考 インテックス大阪全体=70,000 m²
 甲子園球場(グラウンド)=13,000 m²

展示会の参加数(面積)
 ・44カ国、2,215社
 ・展示総スペース 52,000 m²
 ・野外展示エリア 43,000 m²

来場者数
 ・ビジネスデー 4日間 約14万人(重複なし)
 ・パブリックデー 3日間 約17万6千人(重複あり)

各国代表の参加状況
 ・フランス大統領(パブリック初日)、フランス首相(開会日)他、11名の閣僚が参加
 ・102カ国より285名の代表者が公式参加
 ・出展した航空機 150機
 ・期間中の航空機売買契約(総額)約1500億米ドル(=15兆円)



Kamae @ Paris Air Show 2013 釜江 明子 - パリ国際航空ショーについて -



第1回開催は1909年、パリ郊外のLe Bourget(ルブージュ)空港を会場とするパリ航空ショーは、世界でも歴史があり、最先端の航空産業ショーとして最大規模を誇る。今年も、50回目の記念大会であり、世界44カ国2215社の企業が参加、110機以上の航空機(重複機種含む)が地上展示された。

さらに、一般企業向けに6ヶ所の展示ホールすべてを使用、大企業VIP専用の展望パビリオンが空港滑走路に沿って(150社以上)建設され、屋外飛行機展示エリアが25ヶ所設置された。午後には、毎日20回程度、実機による飛行展示が行われ、戦闘機の轟音が空に響くと、来場者が外に出て熱心にカメラを向けていた。

初日は、晴れのち雷雨、2日目は晴れであったが、3日目は、豪雨のち曇りの不安定な天気が続く、雨脚が強くなる度に展示ホール内に多くの人が流れ込んだ。特に地元フランスで人気のある大企業が集まるホールでは、天気が悪くなると大勢の人が集まって身動きできないほどに混雑した。印象に残ったのは、製品や部品を通路に向けて展示し、奥には受付、ソファ、軽食コーナー、バーカウンターなどを設置。高級ブティックやカフェのような海外企業の展示ブースだ。さすがはフランス、洗練されてとてもおしゃれな雰囲気だった。

日本エアテックの展示ブースは、奥行3m×幅4m、13.5mの面積で、出入口にも近いのでわかりやすく、人通りもある位置にあった。壁面に「明石城と桜」と「明石海峡大橋」の写真を印刷したので「日本で勤務経験がある」、「家族が住んでいる」など日本人の縁のある人が立ち寄りやすかった。また桜をあしらった日本パビリオンにも近く、周囲に調和していたと思う。ガラスケース内の展示品への関心度も高かった。精密機械加工と板金溶接という、JATの幅広い加工能力をアピールできたようだ。ガラスケースに入れたブリスクの試作品と溶接部品で加工技術で加工技術で加工できた。

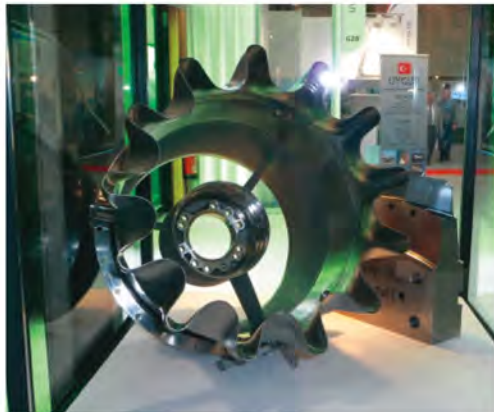
※ブリスク：従来「ブレード」と「ディスク」に分かれていたタービンの回転翼を一体化して機械加工した部品。「BLADE(ブレード)+DISK(ディスク)」の略で「BLISK(ブリスク)」

欧米のTV、新聞は「エアバスVSボーイングの受注合戦」と、大きく報道していたが、会場内には限り、マスコミ報道の内容はほとんど関係なし。例えば、実際には頭上をボーイング787-8型機(Dream Line)がデモ飛行しているのに、メディアはすでに次世代の「787-10型機(開発中・運行開始は2017年以降)」を取り上げていたし、直前に初飛行が報じられた「エアバスA350」は、展示登録には間に合わなかったが、一般公開日(6月21日)に、低空飛行して姿だけ見せていたらしい。

展示ホール内では、民間機のエンジン音は聞こえてこないから、エアショーに参加していても、ニュースの内容と実感はずいぶん違う。むしろ、マスコミが報道しない企業展示の方が勉強になった。近くのブースの人と話すだけでも、普段取り扱う材料や加工内容、似た製品を造る会社だったりしたので、国が違っても、業界として「つながっている」という実感があつた。航空機の展示では、民間機、戦闘機、ヘリコプター、ビジネスジェット、小型機、無人偵察機などがあつた。飛行展示では、大型旅客機A380、フランス空軍のラファール戦闘機、ロシアのSu-35戦闘機が毎日頭上を飛んでいて、人気を博していた。大統領や首相が航空ショーに参加して、地元新聞で大きく取り上げられた。フランスでは日本文化の人気の高い。社名に「JAPAN」とあるだけで見に来てくれたり、「JAPAN」の文字のあるJATボールペンを「欲しい」という人も多く、今回、ヨーロッパで好感度の高い日本から来た「多様な加工技術をもつ会社」としてアピールできた。

現地業者の連絡、準備は大幅に遅れ、展示会が始まると、激しい渋滞と雷雨に襲われ、さんざん道に迷ったりして大変だったが、最終的には事故もなく良かった。フランス語通訳及び現地業者の折衝役として大活躍だったスタッフに感謝したいし、何より、今回は貴重な機会を会社から与えていただいたことに感謝している。本当に素晴らしい展示会に参加させていただき、有り難うございました。

The photos featured in P.A.S — エアショー風景 —



Editor's note — 編集後記 —

歴史の長いショーですが、今まで名前しか聞いたことがなく、実際に参加する日が来るとは思いませんでした。展示会開始の3日前にパリへ到着し、翌日早速JATのスタンドの状態と荷物が無事に届いたかを確認する為にパリエアショーへ向かいました。フランスが懐かしかったのですがパリの電車が汚すぎてびっくりしました。会場に着いたらフランスでお世話になった会社の担当者に挨拶して荷物とスタンドの確認が終わってから展示会内で巡回。展示会開始日には先ず回っている人の人数に驚きました。最初に日本の顧客へ林主任と挨拶周りをし、交代で展示会の見学をしました。やっぱりパリエアショーは広い！一週間交代で回っても全て見切れませんでした。JATにとって初めてのパリエアショーだったが、他の会社と比べても決して負けることなく、来客も多くなって、作成されている品物とスタンドの評判もとてもよかったです。また業界の広さ、常に進歩している技術を見て非常に勉強になりました。

管理企画室 総務企画課 プッシュ・ミカエル

今回、当初国内での手配担当として携わりました。メンバー全員で数回の打ち合わせを行い、個別には幾度となく相談をし手配を進めていきました。その際感じたことは、海外に品物を輸出する難しさと、旅券及び宿泊手配の煩雑さです。当社の部品を送る際は、輸出の規定に抵触しないかを経済産業省へ確認を行い、パッキングリストを作成し、輸出する物の用途や写真との照合、客先への許可申請などやるべきことは大変多く、数カ月で準備することはなかなか困難なことでした。旅券等の手配も一人の予定が変わればその他の人への影響や航空便の空席状況、費用の再計算など変更の度に間違いがないかの確認に最も神経を使いました。その他、パネルやチラシなど必要物のチェックや発注作業など何度も確認をしました。展示会が始まれば、客先で展示会へお越しになられる方の対応や挨拶回りなどを行い、7時間の時差がある中で展示会の状況を、随時日本国内に伝えることも容易ではなく、報告の仕方なども私にとっては良い経験となりました。自社だけで海外に物を輸出する経験をしたことは、大きな経験であり今後の業務に役立てていきたいと思えます。

管理企画室 総務企画課 林 正

